

び名を採用している。最初の測量の時に、聞き取りにくい福島弁を、自己流に解釈した結果であるともいえ

よう。こうした例は、全国各地に存在するということである。

続く。イワナの姿を見る。

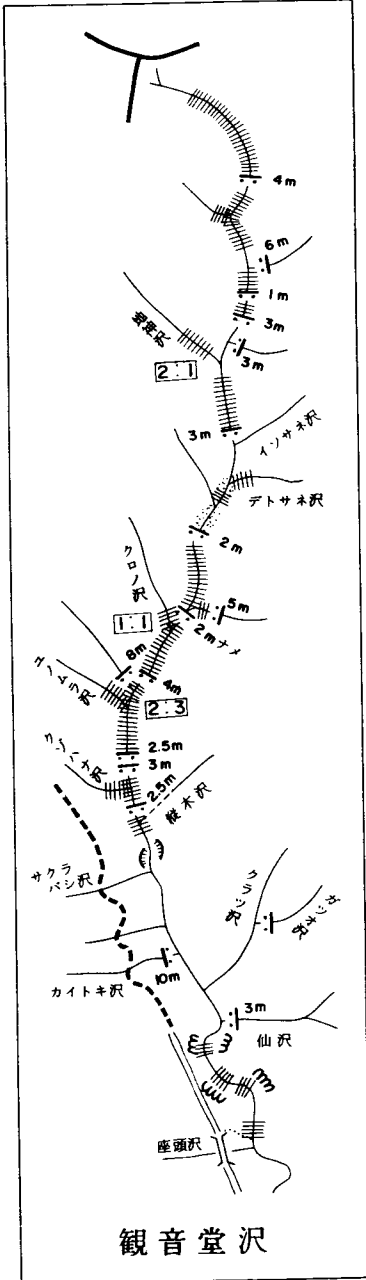
観音堂集落（現在は廃村になって  
いる）の手前より沢に入る。ナメで  
ある。ワラジをつけて遊行開始。

小さなナメとスラブが断続的に出  
てきて、クラツ沢出合に至る。この  
あと沢は河原状となって、しばらく

はドボンということにあいなる。

## 観音堂沢（叶堂沢）

上  
一九八二年九月一九日



ユノムラ沢を見送って進むと、すぐ四郎の滝となる。左岸を楽に登ることができぬ。

この上もナメが続く。すぐクロノ沢出合。水量はどちらが多いともいえない。ほぼ同等。

二郎の小滝を越える。その少し先にもう一つ二郎の滝があり、これを越えたところで長かったナメも一段落である。

少し河原を歩いて、県境になっているイソサネ沢出合。県境というから多少は目立つ沢かと思つたが、ほんの小さな小沢にすぎなかつた。

なおも本流を遡る。三郎の滝が出でくる。左岸はゆるやかな傾斜で滝の上に出れるが、右岸は垂直。こつちの方を登る。

ナメがしばらく続いて地神沢出合。地神沢の方が水量も多いが、そつち

は下降に使うことにして、右の沢に入る。

倒木が多くなってきた。小滝がいくつつか出てくるが、いずれも何なくパス。ナメの傾斜がきつくなつてきて、それが尾根近くまで続く。

沢の水がなくなるすぐ手前で昼食。尾根にはすぐに上がった。

〔タイム〕 遡行開始(八:五〇) ↓ ク

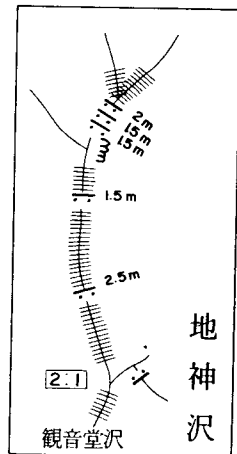
## 地神沢

L  
一九八二年九月一九日

尾根から五分も下ると沢筋となる。

下つてゆくとガレ場となり、そのすぐ下よりナメとなる。本流とはその先で合わさり、すぐ三つの小滝が出

地神沢



ラツ沢出合(九:〇五) ↓ クロノ  
沢出合(一〇:〇五) ↓ 地神沢出  
合(一一:三五) ↓ 尾根(一二:五  
〇)

てくる。このあとナメは一時途切れるが、すぐ再開。

トチの実が落ちてゐる。実だけがはじき出され、岩のくぼみにたまつ